



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-7-?



『《最終戦争伝説》 伝説 』

(発掘作業中)

霧樹里守 is 土岐真扉

(メモ) 「賢神と愚魔の伝説」 (2016年10月26日)

[\(メモ\) 「賢神と愚魔の伝説」](#)

2016年10月26日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)

かつて全ての人は賢かった。

しかしあまり賢くない人々もいた。

...

そして後の世の獣人たちは、
賢きものたちを神と呼び、

愚かだった者達を、
悪魔と呼んだ...

(劇中劇その一) あたし達はオリス・ケアラン 《暁(あかつき)の星》。

『(テラザニアの斎姫連) 没原稿(手書き&書き直しの嵐の草稿群) 3』 (@社会人～ウツこもり～断筆期★)

2007年6月1日 [連載\(2周目・地球統一～ESPA\) コメント\(1\)](#)

(※「コクヨ ケ-31 20×20」使用、シャーペン縦書き)

(劇中劇その一)

あたし達はオリス・ケアラン——《暁(あかつき)の星》。

創芸学市アール・ニィでも一番の興行収入を誇る映像集団だ。

仲間の半分は地球人留学生。

その、提案で。

技術の進歩した——進歩しすぎた——リスタルラーナの、味覚・嗅覚や温度・振動まで付く個人用密室感受器が一般的(あたりまえ)なところへ、あえて集団観賞用の開放立体映像をぶつけてみた。

ウケた。

部屋から出て、誰かと待ち合わせをし、同時にひとつのものを体験して笑ったり泣いたりし、終わってから一緒に食事でもして、話すうちに時間を忘れる。

そんな後進国地球のいちばん安上がりな娯楽に、文明人は飢えていたのだ。

おかげで人口管理局から“結婚・出産率の向上に功あり”とかで表象までされてしまった。

映画のソフトはむろん、高価な投影装置も飛ぶように捌けて売上は天文学的。

企業は出資をしたがって相乗りでもいいと列をなすし、政府の援助金まで出るし。

新作のための条件は万全なのだ。が——

動く絵コンテともいべき合成画面はおおざっぱな色・形・動きと台詞(セリフ)を投写した立体映像で、会議卓をとりまいた連中がてんでに端末から入力するたびに、主役がおしのけられたり脇役がめだったり、いきなり場面転換だの色調の変更だのしたりする。

飛び交う主張のまあ喧(やかま)しいこと。毎度のこととは言いながら、予定を三日も超過しての連夜の激論である。

撮影の準備はほぼ整っていると、いうのに。

全員そろって息の切れた一瞬の空白を拾い、

「応慶(オー・ケー)」(よろこんで応じます——?——“了解”の意の慣用句：翻訳表示)

と、地球前史時代の一地方の俗語(らしき

『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。 (1) 』 (@1983.01.10.)

2007年3月16日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(1\)](#)

◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。

ティリーさんによる前書き。

83.1.10.

この話をあたし、1人称主語で書く気ってなかった。あのですね、この話、あたしの話ではないわけなんです、もちろん。なんでもちろんかっていうと——読んでみてもらえれば解ると思うけど、こんな凄いマネ、あたしにできる筈がない！

実話です。

んで、他人の話なのに、なぜあたしが1人称代名詞を使って文章書いちゃうか——ていうと、この話を身振り手振りでえんえんしてくれたサキ達の語り口調があまりにも達者だったからで。どんなに巧く書いても、あたし、3人称主語で彼女の物語のあの臨場感、出せる自信ってない。

それと。

つい最近、やはり同じサキが、地球の古代小説1話、訳して誕生日に贈ってくれまして。それがやっぱり1人称主語の、仮空のストーリだったんですよ。

それまで公式に、地球の文化史の一端を紹介する為として直訳されていた“シショウセツ”てやつしかあたし“自分”をあっし示す主語で書かれた物語って知らなかった。あたしあの根の暗いなんかぐちゃぐちゃしてわけの解んない話ってきらいで。だからだいぶ以前にサキと議論しまして——“なんで地球ではこういう表現形態つくられたわけ？”

あ、その地救語にもこの話、翻訳してもらえる予定だから、これだけのフレーズって不親切か……リスタルラーナ文明圏ではこういう形式の文学ってこれまで存在していませんで。だからとっても不安……自分で、うまく書けているのかどうか。

どうも話がズレました——とにかく。1人称主語形式の小説のごく1部しか読まないで“不健全、意味のない思想”と決めつけていたあたしにサキがあらためて贈ってくれた話……面白かったんです。もの凄く。

「地球式の分類でいくと、それって“文学”扱いはされていないんだよ——。」

とは、サキの言。……どうもいまいち、あたしは地球人の物語観というものはつかみきれない。あの話あんなに面白かったのに。

すっかり考えをあらため、“1人称主語”に惚れこんでしまったあたしは、とにかく実験作としてこのストーリーをみなさまにお届けしようと思います。

だけれど始めに書いたように主人公はあたしではないので。“わたし”とサキは自分おことをきちんと発音して呼びます。

それでは。

むかし、むかし……と、実はつい最近のできごとなんですけれど、リスタルラーナ文学最盛期のもっとも正統な語りくちからこの物語を始めることといたしましょう。御用意は、よろしいですか？ それではしばしひととき。

——むかし、むかし……

宇宙暦0018. 第9月. 41日,
ティリー、ことティリス・ヴェザリオ記。

○ ~~1話終わったあとにラストとして~~
~~——“タイム”のエピソードもって来よう。~~

○ ~~テーマは？~~ ~~とにかくエスパッション書きたい。~~

○ ~~ラスト、てか後がきがわりに「どお？」~~
~~——「う〜ん。やっぱ実名出すのってなまずいんじゃないの？」~~
~~——とか、入れる？~~ ~~ソレル女史云々のふくせんとして。~~

○ ~~あんまし夫枚にはしたくね~~ ~~な~~。 ~~“俺と好”もぜんぜんメド~~
~~——ついとらんのだし。~~

○ ~~とにかくこれ書くとしたらよほどいっしょけんめ書かなきゃ。~~
~~——んでもって本物の後書きに“実は姉貴と共同の物語なので”~~
~~——ての書くわけ。~~

○ ~~……だけどホントにマジに1人称で書くわけ~~ ~~——？~~
~~——まあ、試作の1話くらいはいいんじゃないの？~~ ~~うん。~~

◎ ~~前書き（ティリー）~~ ~~——~~ ~~本編（サキ）~~ ~~——~~ ~~後書き（会話）~~
~~——~~ ~~あとあがき（まやと）、~~ ~~くらいの構成。~~

○ ~~え、あたしの悪友たちの莫迦話につきあって下さっちゃって~~

— ありがとうございます、てんであとあがきはじめていな♪ —

コメント



りす

2007年4月27日2:23

え～～～……☆

お恥ずかしい話、新井素子の『星へ行く船』を初読して、
感化うけまくりでトチ狂ってるだけ、という単なる事実が、
バレバレな「設定書」ですな……………☆ (^◇^;) ☆

P1

「おーいだれか、サキ知らないか？」

「知らないっスよ監督。」

「あら、さっき映話室の方へ行くのを見かけたけど？」

「またなんか事件なんじゃないのかい」

『監督』は大袈裟に詠嘆を演じてみせた。

「ああったくもー！ 月に一度の撮影日ぐらいちゃんとスケジュールを開けとけないのかね！」

スタジオ中で笑った。みんな忙しい。多忙な中、無理に一日開けて、月に一度は必ず集まって来るのだ。

サキ他数人が特に忙しく、定期的に生活できない仕事にたずさわっているらしい事は、みんな承知していた。

にも関わらず、サキが女主人公（ヒロイン）役を引き受けたのは、全員の熱望と数人の策略——サキ自身は陰謀だ！とわめくが——

によるものだった。

だから彼女になにか不都合が生じて、その日の撮影が予定通りに進まなかったとしても、だれも怒る者はいなかったのだ。

そもそもこのアマチュア総合芸術集団『オリ・キャラズ』自体が、あっちこっちから集まってきたきさくな若い連中ばかりだったから。

（ああったくもー！ 月に一度の撮影日ぐらいスケジュールを……）

建物からかけだそうというサキの頭に、ひょいと“監督”の思考

P2

……が飛びこんできて、サキの感情と重なった。

まったくだとサキも思う。本業副業アルバイトに学校と、一日百時間あってもたりなくなりそうな多重生活者サキは、平日の夜や午後の練習に顔を出せる機会も少ない。

せめて撮影日くらいは、——自分の出番がないにせよ——きちんと仕事を手伝いたかったけれど、どうしてもさっきの映話が気に掛かるのだ。

いや、正確には映話でなく、相手によってあらかじめスクリーンスイッチの切られた、密告電話である。

信憑性がまるで無いばかりか、なんらかのわなである危険性さえもないとは言い切れないのだが、今サキが追っている事件は泥沼で、それこそわらでもつかみたいのだ。

ことわらずに出て来たのは悪かったかとサキは一瞬ちゅうちょしたが、確認するだけですぐに戻ってくれば、午後までには戻って来られるだろうと考えて車に飛びこんだ。

密告電話というのはこうである。

『——保安局特捜課（ジャネット）のサキ・ランかい？ 暗黒（ブラック）組織クークーのネタが欲しけりゃ1時間以内にジンヴィーズのカフェまで来な。』

ジンヴィーズ通りというのは、首都惑星リスタルラーナの商業区と緑地帯の中間部にある、レストラン等の多いちょっとした街の事だ。

無論このふざけた名前は隠語であるが、そこのとあるこじんまりとしたカフェテラスが、実は裏の世界と表との接点の一つであることは

P3

サキも先刻承知していた。

そこへ言われた通りに一時間でつく。

サキは幾人か顔見知りの情報屋たちの姿をおもいうかべてみたが、そこにいるのは一般の、何の関係も無さそうな人々ばかりである。

しばらくたたずんでいたが声をかけてくる者もない。

思念波を探ってみても、見つからぬ。

サキは拍子抜けして車に戻った。一体なんだっていうんだらう。

再びエンジンを始動させて緑地帯——公園区——の方へ抜ける。

スピード制限があるため徐行しながら、あっちこっちへ考えを巡らせていると、角を曲がった所で、不意に一人の子供が視界に飛び込んできた。

ようやくと歩き始めたばかりの頃なのだろう。小さいのが、たっぷり5mはある木のとっぺんでちょこなんと枝に腰かけている。

年のわりにはみごとにバランスを保っているのだが、いかんせん、枝の根かたが重みにたえかねて今にも——折れた!!

ドアを開けるのももどかしく、サキは車から飛び降りた。

そういう時、エア・カーは自動的に停止するようセットしてあるから問題はない。

サキは子供を一旦、一段下の枝にひっかけたが、すぐまたその

P4

枝も折れてしまった。

ざざざっ！

悲鳴もあげず、その子は垂直に落下してくる。

3m 2m 1m ——ジャスト！

ぎりぎりの所で、サキは子供を抱きとめた。

ショックをやわらげるため、そのまま地面にころがりこむ。

「う～～～！」

サキはうなった。

もろに頭を木の根っこにたたきつけたのだ。

ドジさ加減だけは一生直らない。

子供は怯えた様子もなく、きょとんとして空を見上げている。

サキはなんだかおかしくなった。

「それにしても、まあ、いったいどうやって登ったのかいな」

5mである。

サキは頭をさすりながら上を見あげた。

本当なら距離から言っても念動力（サイコキネシス）で落下を食い止める方がよほど簡単なのである。

が、場所は人出の多い公園の中。だれにも見られずにすむ心配だけはまずなかったから、めだつことはなはだしいまねは避けねばならぬ。

サキは子供を抱いたまま、ようやくの事で上半身を起した。

服が泥だらけ。とんだ災難だ。

P5

「あっ痛っ!!」

ついでに足までくじいたらしい。

「ペル、ペリル！」

若い父親らしい動てんした声がかけてくる。

サキは子供を抱えあげた。

「大丈夫！ほんのかすり傷ぐらいしか負っていませんよ」

ちょうど逆光になって、若い父親の顔はよく見えない。

彼は子供を受け取ろうと両腕を伸ばしたまま、サキに気づくなり、はたと動きをとめた。

「——サキ！……」

「え?!」

まぶしくてしかたがないので、サキは木の幹に体をささえて用心しいしい立ちあがった。

手ぐらい貸してくれればいいのかと思う。

わたしを見て驚いているようだけど——だれだろう。

左手を上げてちょっと光をさえぎるようにして、サキはそのよく光る切れ長な灰色の瞳で相手を見やった。

「あっ！」

————セイ！

それに気づいた時、なぜだかサキは不意に逃げだそうとした。

背後の木をよけるために不自然な方向へ体をひるがえし、

ためにサキは今くじいたばかりの足をさらにねじってしまった。

「痛（つ）っ!!」

がくんと前のめりに倒れそうになった彼女の腕を、危うい所でセイが捕えた。

がっしりした力でサキをひき起こし、小刻みに息を荒くしている彼女を、小鳥でも扱うかのように包みこんだ。

「――さてよ。」

サキは軽いショックで青ざめている。めまいがして過去にひきもどされそうだ。

セイもこの再会にとまどっているようだった。

「なぜ、逃げるんだ……？」

ジーイ　ジーイ　とセミによく似たリスタルラーナの昆虫が鳴いている。

木もれ日が、芝生にもサキの肩にもまだらを作り、ペリルと呼ばれた男の子は、親指をくわえたママ、きょとんとして二人を見あげていた。

一分たったか、十分たったか、かなりに思われる時間が過ぎて、サキはようやく平静をとりもどした。

「ごめん。もう大丈夫。」

なにが大丈夫なのか、サキはゆっくり振りかえった。

「久しぶりだね、セイ。」

(未完) .

2007年5月18日 [連載（2周目・地球統一～ESPA）](#) [コメント\(1\)](#)

(p. 5)

「ん。ちょいとね。衣装とか小道具がもっと資料欲しいって言うんで、地球（うち）まで取りに戻ってた。」

「実家（うち）って……極東平野出身だっけサキは？ え、資料って——」

「母の遺した書庫にね、あの時代の古書がごっそりある。」

「ウソだろだって、俺いま図書館行ってた帰りなんだけど、前アーマゲドン期の伝説に関しちやそもそも出版点数自体が極端に少ないって」

「司書コンピューターが言ってた、だろ？」

「そーそー。いったい作者（まやと）がどうやって脚本を書いたのか今不思議に思ってたところ。……あれ、どうして……」

ニッ、とずるがしこっぽくサキが微笑んだ。

「誰が…」

(p. 9)

…球的レベルの文化遺産じゃない、かなり個人的な資料が紙に書かれた形のまま大量に保存されてあったってところなんだ。」

「カミに。へー、そりゃ貴重……」

「だろ。で、そこの所有権とか著作権とかは全部わたしにあるんだよね。管理と研究は一応考古学会に全面委嘱してあって、今、リスタルラーナ科技庁の協力で、研究者用の分子レベルまでの完全コピー、限定制作しているんだけど——これが顔で手にはいる。」

コホム。効果をねらってサキは一息ついた。

「早い話が資料、翻訳して真谷人のところに持ちこんだの、わたしなんだ。磯原清の日記帳とか、アルバトーレの予言の書の写しとか——まあいろいろあってね。」

「ぐわっ」

“清”はうなった。

「冗談だろ!? まさか、じゃ、あれ全部——……」

「実話だよ？」

(p. 10／ver.1)

微笑んだその横顔が光に透ける。

「地球人は——、わたしらはもっと自信を持っていい。リスタルラーナには5000年の昔からの整理された記録があるからって、みんなついコンプレックスを抱きがちだけれど.....地球にだって1000年の『大空白時代』をさらに逆のぼれば、神代の伝説として伝えられた最終戦争前の、6000年以上の有史時代があるんだからね」

「6000！ う～～、概念の外だな。神々が世界を創りたもうたのが一千の時の彼方だってエのに俺ンとこの信仰じゃ」

「あは、何所もそうだよ、地球はね。だからこそいいんじゃない？ 若い世界でさ。」

「10もの世紀をつかまえて若いなんぞと言わんでくれ！」

悲鳴をあげる“清”をサキはケラケラと笑いとばして。

「甘い。知りあいでもリスタルラーノ考古学かじってる奴がいるけどね。なんと研究の対...

(p. 10/ver.2)

からからっと笑ってのけてサキは平然と言う。

「う～～。ンなわやくちなっ」

伝説はあくまでも架空のものであって欲しい——んだよね、“清”みたいな現実主義者（リアリスト）にとっては。

「大体あの話、フィクション臭い挿話（エピソード）の方がよっぽど多いじゃないか！ 磯原清が実は超能力者（まほうつかい）だった、とか精霊の意志がどうか、リスタルラーノには理解できないだろう古い概念（ものがたり）ばっかし」

「ESPと言って欲しい.....。すいませんねエ、現実には穴をあけちゃって。」

「まさかサキは信じてるわけ。その——」

「いわゆる超常現象ってものが実在するってことを知ってるよ」

余裕——というか、かすかな自信とも呼べるものをサキはきらめかせて微笑み。

それからくしゃくしゃと前...

(p. 10上欄（枠外）のMemo)

「連盟文化吸収の弊害だなァ。つい20年前までは地球人は代々のその伝え語り現実を示しているってことを知っていた筈なのに。なにも『先進（リスタルラーノ）』文明に染まって自分の“現実”の範ちゅう（境界）をせばめてしまう必要はないんじゃないの？」

『 ○ 序 ○ 』 (@1991.02.10.) リスタルラーナの首都惑星上にある総合芸術学府、アール・ニィ。

『 ○ 序 ○ 』 (@1991.02.10.)

2007年2月28日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(2\)](#)

あんまり入れ子構造にするのもマズイとは思うが。

1991.02.10

○ 序 ○

地球が統一されてから30年ほど過ぎた。

異星人類リスタルラーノとの第一遭遇を経て、公式名称を地球系開拓惑星連邦——通称・テラザニア——と改め、年号を宇宙暦としてから、20余年。まだまだ混乱も、難問も、山積みになっている。

かたや星間連盟リスタルラーナ、高度に発達しすぎて停滞期を迎えていた文明圏にとっては、未知の文化形態との接触は数千年ぶりの賦活剤だった。

つまり、地球からの留学生にとって、自国の文物を紹介するというのは、とてもいいおカネになる、ということである——。

○

ここは、リスタルラーナの首都惑星上にある総合芸術学府、アール・ニィ。留学生、と書いたが、地球でいう大学の概念とはだいぶ異なる。むしろ、規模は全然ちがうが、芸術村、とか呼んだ方がしっくり来るだろう。

アール・ニィ府民の認定を得た者は、死ぬまで学生であると同時に、入府した瞬間から自分の才能で食べていくことになる。住居とアトリエ、講堂やステージなどは連盟政府から無償で提供されているが、管理運営は自治組織によってであり、自治会費用に食費に被服費、専攻分野の素材や道具類、そういったものはすべて自己負担なうえに、原則として外部からの仕送りは認められていない。自治会に納める学資も稼げない程度の才能なら、やめてしまえ、という、実力主義のリスタルラーナならではの、容謝のない制度である。

とはいえ、それひとつでは収入につながらない芸、というのも多い。しぜん、複数の人間が集

まり、音楽系なら演奏団単位、服飾なら意匠から立体染色までの工房単位で、外貨を獲得することになる。日中の講座時間帯以外の活動だから、地球でいえば学部外の同好会にあたるが、彼らにとってはそれが生活の手段でもある。要するに、アール・ニィ在住の学生は、全員がセミ・プロで——しかも片手間の趣味でもあることが有利に働いて、企業所属の職能集団より、むしろ高水準であることを誇っていたりするのだった。

—そんな共同体が—そういった、ひとつの都市全体が芸術業(?)で盛え、種々雑多な共同体が数あるなかでも、とりわけみずぎわだった個性と能力が吹きだまってくる場所というのはやはりできるもので、ここ数年、自治会への納付金トップの記録を更新しているのが、オリ・ケアラン。リスタルラーナの上古語で“史書”を意味する名の、映像集団である。

出資企業との交渉に出向いていた連中が笑いながら室内になだれこんできた。どうやら全面的に条件を呑ませたらしい。もっとも、これまでの5年間で、地球政府の統一に至る歴史を実録ものの風に再現したシリーズで大当たりをとったという実績がある。多少のわがままなら黙っていても通るといふものだ。

今度の企画は最終戦争伝説。異星文明のリスタルラーナのみならず、地球文化圏の人間にとってこそ、謎と迷信の彼方への好奇心を満足させる作品となるはずだ。

すでに地球政府の文化庁から協賛と—考古学界の全面協力の約束をとりつけてある。それどころか、早々と、教材としての使用の申し入れが教育庁からあったという。資金源はたいそう潤沢だ。資料探しにも力がいろうというものである。地球本星の考古史料機構に超時通信でアクセスした端末のすみで料金標示が走っているが……。オリ・ケアランの本部兼作業室は、うわんとうなるように賑やかだった。

奥まった一角では、続きものに当然なる予定の、全体の構成を定めるべく、脚本担当者たちがかなり混乱した表情でよりあつまっている。

紙片をかたてに大方のながれを説明しているのは灰色の髪地球人だ。古文書解読の達人で、何冊も出している訳本のおかげで彼女自身が学資や生活費に困るといふことは決してないのだが、何故かひきずりこまれて以来、いつのまにか主要メンバーにおさまっている。

「——で、以上が最後にこれが、今回のタネ本に使えるような文献の時代と著者なんだけど」
言葉が切れたとたん、地球公用語でもリスタルランでも形容しがたいような擬音で悲鳴をあげて何人かが机につぶした。

「うわあ～～、ややこいっ」

誰が言い出した企画か知らないが、地球考古学界の専門家ですら最終戦争前後の地球史を理解しやすいように説明するというのは困難なのである。それをまず、自分で覚えたうえで、ひとにわかりやすく、かつ面白く、しかも今回は誰か実在人物を主人公に据えての物語形式で脚本を書け……というのが、監督兼総団長からの厳命である。言われた方の苦勞ときたら前回までの五作の比ではない。かといって、意地っぱりの負けず嫌いがオリ・ケアランの身上だから、ここで出来ませんなぞと言うくらいなら本課の単位を犠牲にしても、期日までに仕上げてるに違いない。

こうなると本末転倒の見本だな。

歴史考証担当の地球人——サキ・ランという——は、内心で苦笑した。地球式の大学とちがって卒業年限のないアール・ニィだからこそ出来るぜいだくた。

「とにかく、」

と、脚本家のなかでもまとめ役の、ひときわ小柄なりスタルラーノが片手をあげて言う。

「ちょっとマトを絞ろう。ひとくちに最終戦争伝説と言っても、前後100年くらいの幅があるワケだし、舞台の範囲も広すぎる。そのうえ移時空装置なんてモンが出てきてくれた日には——……」

「ちょっとサキ、確認しておきたいけど、その超古代文明とやらも地球式の迷信の類と違うの？ 時間移動なんてマネは私達リスタルラーナの技術でだって考えもつかないわよ」

「ところがこれは史実として正確な記録が残ってるんだな」

「この……なんだっけ、チョウノウリョク？ とかいうのも本当に実在したの？」

「うん、そう。」

「信じらんない。思っただけで物を動かしたりできる人間の心理描写なんて……どうやって表現しろって……」

「でも主人公に据えるとしたら、このコがいちばん面白そうじゃない？」

「ええっ、あたしとしてはコロニスツ成立あたりがやってみたい」

「時代が早過ぎるよ。そこから始めて一年放映で、どうやって最終期まで……」

「しかしよく地球人類って絶滅しなかったものだね」

俗説

地球第三期文明（いまを第四期とする）

『 (題未定) 1 』 (@中学?) ティリーさんは今メゲテいます。

『 (題未定) 1 』 (@中学?)

2007年5月18日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

ティリーさんは今メゲテいます。とっても落ち込んでいます。直截に言うと、ひどく深刻に悩んでいるのです。

ティリーさんの友人たちは、いつも大抵おしゃべりなので、何かしらお互いの間で問題が起こった時にでも、相方言いたいだけ自分の言い分を話してしまうと、あらかたのゴタゴタは解決してしまうのです。

だけど、今度はちょっと勝手が違いました。

ティリーさんのお友だちのサキが相談を持ち込んで来たのは二日前でした。(つまりティリーさんはそれからずっと悩んでいるわけです。) サキは友だちの一人を自分の友人たちのグループの仲間に入れようと思って遠くの町から連れて来たのですが、サキがどうしても抜けられない用事で一週間程留守にしている間に、どういうわけかその人は——女の人です——何かにひどく腹を立てて、飛び出して行ってしまったのです。

帰って来たサキは慌てました。連絡しても、その人は元居た所へは戻っていないと言うのです。サキは、その人がもう十分自分の仲間たちに慣れていると思っていたと言いました。その人が何に傷ついて飛び出して行ったのか、解らないと——……。

サキがあんなに饒舌に人に愚痴をこぼして行くなんて、あれはいつも自分一人で悩み事を解消しようとしている彼女にしてみれば、泣くのと同じ事なのです。それなのにティリーさんは、彼女の為に何もして上げる事ができないのです。飛び出して行ったその人に理由を聞きに行っても、行方が知れないのですから……。

それでティリーさんは自分の無力さが哀しくて、腹立たしくて、人間がどうしてこんなにも——口に出して言わなければどんなささいな想いも伝わらない程に、そして精一杯想いを込めて語ってさえ、しばしば相手に真っ直ぐには伝わらないほど——悲しくできているのかが解らなくて、やはりどうしても落ち込んでしまうのでした。

エスパッション通信。

翻訳・(本名)

その1. 我が悪友どものこと。

こんにちわ。

(夜読んでる人、イチャモンつけるのはやめましょうね) 皆様のだしゃべり作家、通称ティリーさん、ことティリス・ヴェザリオでございます。

いやあ。お陰様で。

人気投票で賞なんか貰っちゃったおかげで晴れて編集部づとめを引退、今度っからは毎号連載だもんね、毎号連載。いつもいつも、一定のスペースが空いていて、好きなことが書かせてもらえる。

うわあ。まるで本当に作家になっちゃったみたい。

(編集部註：この人、まだ自覚がないんですかね)

もっともこんなミニコミ同然誌3流雑文書の端くれに混ぜて貰っただけじゃ自慢にもなりやしないけど。

(後日談：編集長がイジケました)

ともあれ——ですねエ、ともあれ。

自分がメ切り……なんという響きだ！……に負われる身でありながら他の人のメ切り追いかける、ってのも変な話だろうし。で、やめたんですよね、あたし。“ギャウザー”の編集部。

もともとが安月給でしょう。科学庁統計局時代の貯金なんてのも既に使い果たしちゃってから久しかったし、退職金でまたマイクロ・カセット棚(ほんだな)増やしてしまった。それでいて、今のところまだ、確実に定期の仕事っちゃこれ1本。うーむ、我ながら無謀だなアとは、思う…

…

それで今、生活費をせめて浮かす為、某所にころがりこんでいます。

某所。——《エスパッション号》、という。リスタルラーナ星間連盟内でも屈指の女性科学者・某S女史(ぜんぜん名前を伏せた事になっとらん一、ハハ☆)の、私設研究所兼長距離航行(ワープ)船。所在と研究内容はナイショね。なんでこんな所にころがり込んだかという、伝手(コネ)があった。

自慢じゃないけどと云いつつ何度でも書いてるけれど、実はあたし、天下のスリーナエロスの卒業生でして。（えらいだろー）

そこでひと頃同級生やってたサキって子が、地球人（テラズ）の第1期留学生だったんだけど、その後某S女史に委託教育生（でしいり）して、今、助手兼護衛兼居候——みたいな事をやっている。そこへ頼りついたわけです。

以前にも何度か遊びに行った事はあったんだけど、割にいー加減なフネでねー、これが。

研究所区と私邸区とに分かれてて、研究所区の方はもうばっちし、研究用設備と所員用の個室しかない。問題は私邸区でね、素性の知れないのがウロウロいんの。皆んな、一応、S女史の研究目的の理解者でね、出来る事があれば手伝ったりはしてるらしいんだけど——生活費が浮くから、って理由でズブとく居座ってるの、あたしだけ、では談じてないと思う。言い訳だけど。

この、得体の知れない集団、あたしも含め勝手に寝泊まりしてはまたふらりと出ていく連中を、《エスパッション》では“エスパッション・サークリスト”とか“サークラー”、あるいは単に“お仲間”と呼んでいる。

“エスパッション”

この言葉の意味の説明は、とりあえず、はぶくね。

それで、ですよ。ここ、この《エスパッション》に集まってる人間て、み～んなユニークな変り者で、スゴイ奴ばかりなのよね～～。某S女史を初めとする諸氏の了解も取りつけた事だし、あたし、これから当分の間、“ギャウザー”のこのスペースをこの船、と乗り込んでる人間達、に関するレポートで埋めて行きたいと思いますわん♪

なまじっかなフィクションなんぞより余っ程面白くなることうけあいなので、乞う御期待!!.....

さて、今号“ギャウザー”この欄は、あたしの近況報告とこれからの予告を書いておけ——との、編集部サマからの御命令でござえますので.....

とりあえず当《エスパッション》シリーズの主要メンバー紹介なんぞに、行っちゃいたいかと。何故か意図もなくこの船は女性上位ですが。

某S女史：言わずと知れた有名人。研究所長であり全ての運営・出資の責任者でもあるのだけれど、他の仕事あまりにも多忙を極め、不在がち。

ミズ・クラレン：その個人秘書（パーソナル・セクレタリ）。《エスパッション》関連の全ての実務と、ひと時とじっとしていたためしのない“サークリスト”相互の連絡係を一手に引きうける。血キュ連邦（テラズ）系グリムストーン星出身の有能な女性。

サキ：前述のあたしの元同級生。事実上の《エスパッション》私邸区域中心人物。何か騒ぎがある時には必ずこのコが1枚噛んでいる☆という、やっかいかつ観察対象としては最っ高に興味深い人間。連邦系首都惑星（テラ）出身、現代史に詳しい人ならすぐに彼女の本名を見つけ出せるかも知れない。当年にとって20歳。

レイ：彼女の正体はあらかじめバラしておいてしまおう。

(未完)

コメント



りす

2007年5月18日2:12

う～ん.....☆ 「ティリーさん」ってば、
今のコトバで言うと「ブロガー」として、
ライター界にデビューしてたんだな.....☆ (^_^;”

『 幻 （まぼろし） （仮題） 』

[『 幻 （まぼろし） （仮題） 』（@.....コレが中学時代の作品だったのは、ちょっと怖い.....☆/Okinaの400字原稿用紙...](#)

2007年5月17日 [連載（2回目・地球統一～ESPA）](#) [コメント\(1\)](#)

幻（まぼろし） （仮題）

不吉な予感にせかされて、オートロックの具合も確かめず、古めかしい、はっきり言えばとうの昔に取り壊されてしかるべきだった安アパートの非常階段をかけあがる。

ガランとした灰色の空間。

ガランとした空虚な空。

じめじめした路地裏を、彼女の高い靴音だけがカンカアアンと吸い込まれる波紋のように渡って行った。

冬の早朝。

光の無い町。

サキはダンダンとドアをたたいた。

開かない。

彼の気配がない。

ノブに精神を集中させる。

1、2、3！

ものの三秒とたたぬ間に、鍵は弾かれたようにはねあがった。

パッ、と目に飛び込んだのは、キャンパスいっぱいきらめいている虹色のガラス玉と、浮かぶようにまどろんでいる美しい裸身の女神。

その下で彼が冷たく満足気に横たわっていた。

右手に絵筆を、左手に紅く染まったタオルを握りしめたまま、死でさえ彼の頬に浮かんだ幸福の輝やきを消すことはできなかった。

「——ああ、そうか。できたんだね.....？」

サキはそっとドアを閉め、鍵をかけた。

サキと彼とが出会ったのは真っ暗な、星一つ見えない晩だった。

ビルの谷間を縫ってサキは戦っていた。

相手はおよそ30人。

腕利きの殺し屋集団。

全員がA級（クラス）の超常能力者だから防御（ガード）が固くて精神攻撃は利かない。

跳躍（テレポート）して背後にまわり込み、光線銃（レイガン）を発射して再び移動（ジャ

ンプ) !!

右へ、左へ、後ろへ、下へ、撃つ、跳躍（ジャンプ）、撃つ。

さしものサキも苦戦を強いられていた。

多勢に無勢。

ましてサキは不意打ちの最初の一撃で左肩に傷を負っている。

流れ出る血が生暖かく胸を濡らし、彼女は次第に息が荒くなっていった。

手当てしようにも息つく暇もなく攻撃され、精神を集中して傷口をふさごうとすれば、殺し屋たちが逆に傷口をねらって精神攻撃をしつけてくる。

それでもようやく半数ほどを倒し、残る15人をまいて走り続けるうちに、いつしか彼女は半ば崩れ始めた旧市街の下町（ダウン・タウン）に迷いこんでいた。

「どうやら追跡をあきらめたらしいな。」

サキは荒く肩で息をしながら、光線銃（レイ・ガン）を握ったまま手の甲で額の汗をぬぐった。

手がこわばってなかなか光線銃（レイ・ガン）がはずれない。

調べてみると、最後の、三個目のエネルギーカプセルを丁度使い果たした所だった。

緊張感から解放されると同時に恐ろしいほどの疲れが出た。

傷の手当てをする気力もない。

——ここはどこだろう。とにかく歩かなくちゃ。

腕をつたって血が滴たり、前世紀の石畳に跡をつけてゆく。

ガラんとした細長い空洞に化け物じみた建て物がのしかかってくる。

こういう所ではなにかが背中からおそいかかってくる。

殺し屋ではなく、人を取って食う幽鬼どもが。

意識が遠のく。

と、その時、奇跡的に生きながらえていたただ一つの灯りの下を、だれかが角を曲って歩いて来た。

見覚えのある髪の色——レイだ。

「——レ……イ……」

虹、虹、虹、見渡す限りにきらめき、飛びかう無数のガラス玉の夢の中で彼が歌うように繰り返していった。

——そうだ。そうだ。そうだ。きみのいるべき所はここなんだよ。これがきみのあるべき姿だ。

虹だ。虹だよ。虹色のガラス玉の中だよ。忘れちゃいけない。絶対に忘れるんじゃないよ。いいね、サキ。いいね。いいね……。

「待って！どこへ行くのルーカス!？」

ハッと目覚めたサキの目に飛び込んで来たのは、赤く浮きだした壁の時計（デジタル）。

12月2日、午前3時40分。

人は、死の瞬間、恐ろしい程の感能力（テレパシー・エネルギー）を持つという。普通人も、死の瞬間には恐ろしいほどの感能力（テレパシー・エネルギー）を持てるものだと、言う。

サキはその時にほとんど全てを了解した。

知りたくはない、が、行かなければならないのだ。

彼女は手早く服を着て宙艇格納庫へ向かった。

.....彼、ルーカスにその事を聞かされたのは二度目に彼のもとを訪ずれた時、そう、その日がちょうど三ヶ月前の今日だった。

宇宙の闇と輝きの中をリスタルラーナ母星の小さい方の月、リエスにある古いドーム・シティに向けて宙陸両用のロケット・カーを操りながら、彼女はその日の事を思い出していた。

.....薄暗い、まもなく閉鎖される旧市街の、高層ビルの谷間の一角。

前時代の遺物のような鉄製の箱型エレベーターさえ故障して動かない彼のアパートのドアをノックすると、少し以外そうな彼の声がどうぞと答えた。

「やあ、きみは.....」

「今日は。この間はどうもありがとう。ろくにお礼も言わないで出ちゃったんで気になって.....。少しおじゃましてもいいかな。」

「どうぞどうぞ。退屈してた所なんだ。大歓迎だよ。」

「へー。あんたん所（とこ）にお客が来るなんて珍しいじゃん。」

部屋の隅のおよそ旧式なガスコンロで料理していた青年がニヤついた。

「しかもこんな美人！あんたも隅におけないなー。おい、紹介しろよ。」

「バカ言え。さっき話ししたろ。この間ケガして血まみれでころがりこんできた奴だよ。」

「ああ、なーんだ。でもあんたこんな美人だなんて言わなかったじゃん。殺し屋に負われてる女スパイだなんて言うから、おれ、こーんなの想像してたんだぜエ。」

青年が両手で目尻をつり上げて見せたので、サキと彼は一緒にふきだした。

「ところでルーカス、昼メシの仕度はできたんだが、あんたそろそろベッドに戻る時間だよ。」

「おいおい。せっかく久し振りのお客が来てるってのにそうそう重病人扱いしないでくれよ。」

サキがどこか体の具合が悪いのかと尋ねると、彼はうかない顔をしてたいしたことはないと言った。

青年はニヤニヤしながらお盆を持って来た。

「あっは。どーも不粋な事を言っちゃって.....。お嬢さん、おれ帰るからこいつよろしくねエ。こいつさァ、このとうりの貧乏暮らしでエーヨーシッチヨーにかかってんのだよ、栄養失調。だから無茶してまたぶっ倒れるようだったらやさし〜く介抱して、なんか栄養のあるものおごったげでよ。頼んだねエ。」

にぎにぎしく騒ぎたてながら声の主はすっとなで行って、最後の声ははるか階段の下から怒鳴っていた。

「……ルーカスウ、へんな気おこしておそうなよォ！」

「！ あのイカレポンチ野郎!!」

サキは一人で笑いころげていた。

彼が食事を始めると、しばらくの間部屋の中は食器のカチャカチャあたる音だけになった。
——殺風景な部屋だなァ。

西向きの窓が一つ。

部屋の隅のすり減った流し台と旧式ガスコンロだけの台所（キッチン）。

バスに通じているらしい、ガラスにひびの入ったドア。

味気ない粗末な鉄製のベッドと色のはげたテーブルが一つづつに同じくがたの来たイス二脚。
それから、窓の前の空間をでん、と占領している、かつては豪華であったろうと思われる——
今では元の色もわからないほど古ぼけた——ソファの影にかた寄せられたイーゼルや絵筆、
カンヴァスの山……。

「あれ、あなた絵を書いているの？」

「え、……ああ、金が続かなくて美大は中退しちゃったが、一応画家の卵だよ。……ところで
きみは食事は？」

サキがもうすませて来たと言えると、彼は本も何もなくて退屈だろうから、興味があれば彼の絵
を見てもいいと言った。

職業柄芸術方面にも知人の多いサキは、絵、特に新人や画学生の書く新鮮で荒けずりな絵を見る
のは好きだったので、大喜びで手近にあった数枚を手にとった。

「……きれい……」

灰色の部屋の中いっばいに、一時（いちどき）に深山（みやま）の春が訪れたようだった。
峰々を望む高原の、キスゲの群れ咲き乱れる6月。

「……これ、女神マイラね!? こっちのは英雄マイルダイ・シャサ？」

「きみ、あの神話を知ってるのかい?!」

「——ああ！もちろん!! これはあの双生児（ふたご）の皇子と皇女でしょう?! これは——
ああ………すごい!! イメージどうりだわ!!なんてすてきな!!」

彼女はルーカスも超能力者であればよかったのに、そうすればこんなたどたどしい言葉ではな
しに、思いもかけない場所で愛する人々に会うのがどんなに幸福（しあわせ）か伝えることが
できるのにと、灯のともった胸を左手で包むようにして考えていました。

サキの灰色の瞳がまるで貝の火の火明（ほあか）りのふうにして部屋の中の輝やきを増してい
ます。

彼はそんな彼女のかもすだす不思議な輝やきの空間をじっとながめているうちに、不意に食べか
けのお皿を置き放したまま立ちあがった。

「きみ、今は休暇中かい？ロケット・カーで来てるんだね？」

「え、……うん。」

「頼みがあるんだ。母星（リスタルラーナ）のサリールカ高原までつれて行ってくれないか。」

サリールカ高原と言えば地球（テラ）のアルプス山脈と並んで烏忠一と称されている広大な花

畑が広がっている所。

サキも長い戦かいで心が疲れた時など、花の中に埋もれてただ涙が流れるにまかせていたことが少なからずあった。

「——でも、あなたは——。」

体の具合が良くないのでしょうと言おうとして、サキはその時始めて彼の笑わない悲しい目に気づいた。

「——うん。いいよ。」

彼女は持っていた絵をていねいにもとの所へもどすと、そっ、ともう一度触れるか触れないかほどに手を動かして、席を立った。

(未完★)

コメント



りす

2007年5月18日3:35

>キャンパスいっぱいきらめいている虹色のガラス玉

>虹、虹、虹、見渡す限りにきらめき、飛びかう無数のガラス玉の夢の中

.....え～、この、「無数の虹色のガラス玉」云々というのは、私が金縛りだの自縛霊が見えるだの取り憑かれたただの天井裏に百鬼夜行(?)が見えるだの、実はキノコ型宇宙船に度々誘拐されていて生殖機能や記憶をイジラレテイルのでわとか数々の超常現象的妄想(幻覚?)にふりまわされて怯え狂い、何とか自力更正しようと旧約聖書や仏典や『ムー』だの『仙術入門』だの『日出ずる処の天子』などなどの、トンデモ本まで含めた手に入る限りの関連書籍(?)を読み漁りまくっていた中学1~2年の頃に、とうとう『般若心経』に出会って唐突にそれら常軌を逸した諸現象からの自力更正が叶いつつあった頃に、繰り返し見ていた夢(ビジョン)の中の、「転生輪廻を繰り返して無限の成長を続けて行く魂たちの物語」という世界観の、象徴的イメージであります.....。

>きみのいるべき所はここなんだよ。これがきみのあるべき姿だ。虹だ。虹だよ。虹色のガラス玉の中だよ。忘れちゃいけない。絶対に忘れるんじゃないよ。いいね、

(これは実際、私が夢の中で受け取ったメッセージのそのまんま)。

“ステメン”主メンバー

- 高橋薫 (カオ・ターク=モトナカジマ)
サキに1番声質に近い。ただし“地についた”声。
オリ・キャラクターズ副団長。
- ラーラ (ライオネル・ライヤー=シュテット)
黒に近い褐色の肌。
- リーク (セーレ, リレキス)
- アルサー・ジャン=ジャック
オリ・キャラクターズ団長
- ジョーグ
- リーツ・ミエア
- オランジュ (フランィシ, オラーン)
- シェリル・プラネット (サキ・ラン=アークタス)
- ボルグ・ビヨルン=ブランナー

(※ページ全体にバツテンして「廃案！」と書いてある☆)

2006年10月4日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

- ◎ 統一され、宇宙時代を迎えた未来の地球から過去の歴史を探る。
- ◎ キャラクターはほとんど無視して世界状態を追う。
- ◎ 超古代文明・ESP等、SF的な要素は史実として扱い、
精霊等FT的な要素は注釈付き、あるいは劇中劇の形で挿入する。
- ◎ オリ・ケアのブリーフィング・シーンを入れて重曹構造にする。
.....どこまでエスパ（オリケの日常）を入れるの？

☆ オリ・ケアの企画順序。

1. 「次は最終戦争ネタだね」という話が誰からともなく出て
いつのまにか決定し、勝手にどんどん煮詰まる。
2. 企業からの出資申し入れが事前に来る。
3. 総団長、徹底的に凝ることを主張する。
4. 時代資料集めと平行して題材の作定と全体構成の企画会議が
あわてて始まり.....、実は誰も最終戦争前後の史実を正確に
把握していないことに気付く。
5. 地球等第三期文明史のレクチャー（by サキ）始まる。
(ここまで、「序」)
6. 頭を抱える連中に、サキとティリー、共謀して
文献「KIの日記」をネタ本に使うよう主張する。
7. おぜんだてが整い、スタート。さて.....

『 ☆ 最終戦争以前の歴史について ESP時代の人間が知っていたこと ☆ 』（
@1991.02.11.）

[『 ☆ 最終戦争以前の歴史について ESP時代の人間が知っていたこと ☆ 』（
@1991.02.11.）](#)

2006年10月6日 [連載（2周目・最終戦争伝説）](#)

1. 口伝・俗説・迷信

地域により雑多である。“おそろしい戦争（災厄）があって地上は滅亡し、人類は地下か天上に逃れて楽園復活の日を待った”という根幹は共通しているが、早くに地上に戻った集団ほど代を重ねるにつれ神話化を重ねており正確でない。また、祖系の思想傾向の影響を受けているので見解もまちまちである。顕著なのは、アルバトール、コロニスツ、ゲフィオン等への感情で、地上中心主義者の言い分では前文明を滅した悪役そのものであり、一方でコロニスツ残党や灰色の一族等、彼らを始祖に持つことを誇りとする民族もある。連邦政府は、一応、中立の立場をとっている。超能力・巫司等の実在の是非は誰も断定しえていない。

2. 考古学会編纂の既成資料（公式見解）

人類史を4期に分けて史料を収集・解析。“史実”と“神話”の区分付けに全力をあげている。政府要人にダレムアス・エルシャム系の直系の子孫が多いので、科学偏重の史観にはならない。現～近代史料以外の一般への公開は控えている。

第?期	超古代文明（エルシャムリア）	=	月面及び草星遺跡
第?期	上代文明（アトル・アン）	=	海底及び旧砂漠地帯遺跡
第?期	前代文明（惑星・地球上）	=	各シェルター・コロニー (及び記録カプセル等)
第?期	現代文明（テラザニア）	=	口伝、各都の年代記、戸籍等

3. 未整理・未訳・未検証の各地区古文献類

連邦統合の際にすべて公式には学会の所有となり、勝手な解読や公開は禁じられている。（認可を得ればよい）。各地の神殿や禁域、旧家の倉などに古文書は数多く保存されているが、意図的な文化遺産カプセルとして質量ともに充実しているのは旧スイス及びオーストラリアのアロウ

校シェルターで、この内容物は連邦成立後いち早く公開され、研究が続けられている。B.C.5000～A.D.2050頃までの技術・芸術があらかじめ整理された形で収納されている。

(※通称は“学会”だが、正式には歴史分析局で、所轄は科技庁と文化庁にまたがる。)

一方、灰色の一族の神殿等、最終戦争末期の非公開文書類は、現在の社会感情に影響が大きいとして公開はさしとめられている。A.D.2000～2130までの個人記録の類が中心を占める、無作為・未整理の資料で、最終戦争の真相を解明する手がかりとして注目されている。

☆ 地球第4期文明の特徴 及び
当時のリスタルラーナの技術水準 ☆

☆ リスタルラーナにおける“歴史”への関心度の推移 ☆
→ 年代記制作順 参照

☆ 航時技術について ☆

地球連邦政府統合後、太陽系内の植民者連合（コロニスツ）残党によって封印されてきた月面遺跡の所轄が考古学会に移る。歴史社会学的見地から十分に検証され、今後の世界に害になる存在ではないとの判定を下されて初めて一般の技術系科学者が解析にかかった。（宙暦二十年頃）

その後、命令系統言語にリスタルラーナ上代語との共通性が多く発見され、スリナエロスの全面協力により航時技術の解明が進み、学術利用を目的として装置が復元される。（宙暦五十年頃）。

平行世界理論の計算ミスにより歴史探査メンバーのひとりアリサ・ランを失い、以後、人間による調査行は禁じられた。が、技術の応用によってリスタルラーナ星船遺跡の推進原理を解明。無時間航法が完成した。のち、リステラス星連時代、ESPによる古代調査が一部で行なわれた。

2006年10月7日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

宙暦 年 (地球からの留学生に門戸 開放される。)

宙暦 年 (映像集団 オリ・ケアラン 旗上げ。総団長：
アルサー・ジャン)

宙暦 年 試作的な風俗再現フィルムを連作で発表、名をあげる。
特定出資企業を確保。

宙暦 年 “地球統一史”シリーズに着手。

第一作『楽園再生』

第二作『流浪～興亡』

第三作『都市出現』

第四作『国家統合』

第五作『灰色の一族～人間』

宙暦 年 番外作『惑星の夜明け』で、サキ・ラン、正式メンバーに。
“最終戦争”シリーズに着手。

第一作

第二作

第三作

宙暦 年 リスタルラーナ前代史に着手。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-7-?
『《最終戦争伝説》 伝説』

<http://p.booklog.jp/book/109770>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109770>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109770>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ